

脳梗塞の息子（一）プロローグ

中村 アキヤ

七夕祭りであってJR阿佐ヶ谷駅の南口大通りは豪華に飾り付けられて、賑やかであるが、小さなロータリーを横切つてゆく北口の商店街のアーケードは店ごとに小さな笹が飾りつけてある程度で、午後八時ともなると人通りは閑散としている。

アーケードを十分ほどゆくと左手にパブ「門」という比較的地味ではあるが、こぢんまりとしたスナックが見えてきた。平成二十六年八月のことである。

「ここだ」と私と杖をついた息子の哲也は細い階段を上った。二階のドアを開けると通路の正面に四、五席のカウンターバーがあり、左手には二十席ほどの座席、右手にはカラオケを歌う小さなステージがしつらえてある。客待ちをしていた浴衣姿の若い女の子が数名立ちあがって「いらっしやい」と声をかける。

哲也の馴染の女の子はとつとく辞めていて、知っている顔はなかった。

シックな夏ものを纏った佐々木静子ママが「お久しぶりです。五年ぶりよ」と言つてにこやかに出迎えてくれた。

この物語はこのパブから始まる……。

五年前の七夕の夜、当時四十五歳の哲也はこのパブの浴衣まつりの招待状を貰つて来店、一人静かにカウンターで飲んでいた。数分後に彼の一生が根本からひっくりかえる事件が起こるなどと思つてもみなかった。

哲也は八王子市の郊外にある東京セントラルパソロジーラボラトリーという臨床検査会社の執行役員としてシステム開発を担当していた。毎日発生する膨大な検査データは、全てコンピューターネットワークを通じて関連会社および顧客に送る必要があり、しかも客先との関係で時間に追われる仕事が多かった。

朝八時就業開始の会社は八王子駅からバスで四十分程度の距離にあり、自宅の新宿からの通勤は、二時間はゆうにかかるので、普段は八王子市内に部屋を借りて単身で生活していた。

IT関連の仕事は常に深夜までかかり、神経の疲れを癒すために酒もたばこも量を増し、食事は毎回店屋物ですますので体重が増え、哲也は不健康な生活

を続けていた。

見かねた両親が説得して五月の連休を境に自宅勤務にきりかえたが、通勤の負担がよけいにかかり、早めに結婚させたほうがよいと、お見合いの準備を始めた矢先だった。

当時私は七十歳、妻（七十一歳）と哲也と五歳違いの弟の四人家族で、私は数年前に大手化学会社の関連会社の社長を勤め上げて定年退職し、呆け防止の目的で、あるペンクラブに入会して俳句やら雑文書きの勉強をはじめたところ。妻は三団体ものコーラスグループに所属し、健康な毎日を送っていた。弟はいわゆるフリーターで、ある介護会社でのアルバイトの口を探していた。

十年も飼っていた五番目の家族であるペットの犬を交えて普段から仲のよい幸せな家族だった。長い間、犬の世話で家を空けられず、夫婦での旅行ができなかったが、一月に犬のエリーが死んで半年も過ぎたので、懸案の外国旅行でもと、夫婦して申請していたパスポートを受理したのがその日だった。

平成21年8月6日（初日）

この日は蒸し暑い風のない一日だった。午後十一時を十分ほど過ぎた頃、父親の私は自宅でTVを見終わり、そろそろ入浴でもと考えて立ち上がったところだった。電話が鳴り、妻が「こんな遅くに…」と言いながら受話器をとった。

阿佐ヶ谷のパブ「門」のママ佐々木津子さんからの電話であった。

「哲也さんが店で倒れ様子がおかしいから早稲田通りの消防隊の救急車を呼びました。救急車は四、五分で来る予定です」

十分後、救急車の隊員から電話があった。「入院先は国立国際医療センターなので急行して下さい」

幸い同センターは自宅から徒歩十分のところだ。早速、私が病院に向かい、到着したのは十一時三十五分。哲也が救急車で担ぎこまれた直後で、救急車に同乗してくれたパブの佐々木ママが自宅の妻に電話で到着を連絡している最中だった。

以下佐々木さんの話

「最初、哲也さんは友人の大隈さんとご一緒に来店し、その後はよく一人でいらしてくださいました。今日はお店から浴衣祭りの案内を差し上げたところ、

ご親切に来店されました。飲み放題だったのでハーパーを三杯と焼酎を飲んでいたところ「右手がおかしいからチョット歩いてくる」といって急に立ち上がってよろめかれました。店のものが抱きかかえると既に右手は利かなくなり、唇からよだれが流れていたの、マスターの指示ですぐに救急隊に連絡しました。哲也さんにご自宅の電話番号を聞いたのですが、返事が出来ず、数字を書いてくださいました」

十一時十五分に救急車がきてママも同乗した。救急隊員が数軒の病院に電話したが受け入れを拒否され、幸い国立国際医療センターが受け入れてくれた由。佐々木さんに厚く礼を述べ十一時四十五分に帰っていただいた。ママがお店を長時間空けるわけにはいかないことを知っていた。

哲也に何があったか細かくは判らないが、症状から考えるとどうやら脳出血で倒れたようだ。下手するとこのまま死んでしまうかもと考えると、父親として何をすればいいのか咄嗟に思いつかなかった。でもこの若さでなんで脳出血なんだ？

薄暗い救急待合室で検査と治療が済むまで、二時間ほど待機した。時々救急治療室のドアが開いてマスクをした医師と看護師が甲斐甲斐しく動いているのが垣間見えるが、哲也の状況がどうなっているのかなどの情報もなく皆目けんとうがつかない。いろいろな考えが脳をかすめる。なんとも言えぬ焦燥感。不安感。まず為すべきことはなんだ？妻になんと報告していいか？万一の場合、父親としてどう対処すべきか？

待合室には他に二組の家族が心配そうに待っていた。片隅で十五、六歳の女の子が泣きじゃくっている。「おじいちゃんが死んじゃった」

冷房機の音が急に大きくなったような気がした。どこから迷い込んだのか一匹の蚊がフラフラ飛んできて女の子の足に止まった。

8月7日(二日目)

零時四十分に当直の清水医師が治療室からできて概略の説明があった。

「哲也さんのご家族ですか？来院時、患者さんは意識障害、失語症、右顔面を含む右上下肢運動障害および感覚障害を認めました。CT検査の結果、左大脳半球の被殻という箇所を中心に直径三センチ長さ六センチの出血があり。脳出血との診断です。」

発症の原因は①高血圧 ②腫瘍 ③動脈瘤 ④その他が挙げられます。現在

収縮血圧が230mmHgとかなり高く、今後精査しますが主因は①と考えております。今後脳の出血が止まるかどうかのポイントです。

現段階では、安静を保ち、降圧剤、止血剤の投与しか方法がありません。これらを行っても出血の拡大や意識レベルの低下を認めた場合は手術（開頭減圧や血栓除去）となります。場所が言語中枢に近いので手術は最後の手段です。

出血がもう少し広がり呼吸や心臓を司る脳幹に達すると脳ヘルニア・脳幹圧迫で死亡する可能性が高くなりますが、この段階でなんとか食い止めればと思っております。ただ、今後、言語障害や手足の麻痺などの後遺症が残ることが予想されます」

医師の説明は簡潔で要を得ていた。哲也は未だ生きている。脳出血の範囲がこれ以上拡大しなければ助かるかも知れない。一定の時間が経過し、医師から「いろいろ手を尽くしましたが、出血が止まらず、残念ですが」といわれたら、それでおしまいだ。

こんな事態になっても私は緊張していたせいか非常に冷静だった。事態を素直に受け入れ時間の経過を待つ以外にすることはなかった。何でこんなことになったのか？ と原因を探る気持ちにはなれなかった。

取りあえず妻に状況を電話で説明する。「どうなるか判らないが、病院に来ても待つ以外にすることがないよ」

午前一時三十分に入院のための質問書に記入させられた。言うことは一命は取り留めたのか？ 二時二十分に清水先生が再度現状を説明してくれた。

「二時四十分にもう一回CTを撮ってから病棟に移します」

都度妻に電話する。「なんとか死なずに済むらしい」

家で待機している妻もどんな気持ちだったか。

午前四時三十分哲也は七階北病棟に移される。脳内の出血はまだ少しある由。病棟の担当医師は山口先生だ。哲也は暴れると危険なので太いベルトで四肢をベッドに結え付けられている。右手は利かないが左手で無意識にチューブを引きちぎる可能性があるので大きな手袋を嵌められている。

意識があるのか無いのか、呼吸していることを確かめて、私は一旦帰宅した。

8月8日（三日目）

哲也はまだ意識がなく、病院としては様子を見るだけしか方法がない由寝顔

だけ見て帰宅した。

病名は違うがTVで見たホーキンス博士の姿が目にはらついた。車椅子で頭は座らないまま手足が利かない状態。哲也もまだ若いのに余生をそんな姿ですごすのか。我々両親は死ぬまでこんな息子の面倒を見なければならぬのかと暗澹たる思いだ。病院から帰る途中で涙が出てきた。

8月9日(四日目)

手はベルトで固定されたままだが、哲也は人の話はボンヤリと分かるらしいが、「哲ちゃん」と声をかけても応答がない。情けない息子に向かってこう言うてやりたかった。

「お前は大変なことをしてくれた。自分ばかりか周囲のものみんなを不幸にしてしまった。両親が溜め込んだ残り少ないお金はお前の治療費で消えてしまうかもしれない。ペットの犬のエリーが1月に死んだのでこれからは気兼ねなくお母さんと一緒に海外旅行に行こうとパスポートを切り替えに行ったその日に倒れるなんて。我々夫婦の余生は身体障害の息子の世話でおわるのか？」

でもこれが現実。現実を直視して一生息子のために尽くしかないというのがこの日の悲しい心境だ。

8月10日(五日目)

入院申し込み書提出。哲也の勤務先の社長に状況を電話で報告。哲也は気がついたら突然動かなくなった自分の身体がどうなるか、知りたい様子だったので、今後リハビリで治ると言ったら安心したのか直ぐ眠った。

病室は四人部屋でルームメートはみなお年寄り。ハミガキの水を飲み込んでしまう人、クスリを飲むのがイヤで抵抗する人、皆一応喋ることはできるが、移動は車椅子だ。

8月11日(六日目)

血圧やや下がる。哲也はベッドで上半身を起こし、話しかけると「ハイッ」声を出して答えるようになった。血圧計、酸素供給装置はとりはずしたが、輸液と生理的食塩水の点滴は続行。鼻からの栄養補給は続く。

山口医師「出血は止まりました。一時黄疸気味だったがそれも治りました。流動食に切り替え、栄養をつけてリハビリに備えます」

「リハビリ施設への転院は発症後二ヶ月以内の必要があります。初台のリハビリ病院に本日連絡しておきます。ただ病室が空くまで一ヶ月くらい待つことになると思います」

哲也の右手足の麻痺はかなり酷く全く動かない。話は声を出すのがやっつの状態だが、こちらの言うことは簡単なことは聞き取れるらしい。

第2週目8月14日（八日目）

はじめて車椅子に一時半ほど座らせられるが、首が据わらない。車椅子に乗せられTVを見ているが、中身は理解できているとは思えない。突然モゾモゾ身体を動かしエンエン泣き出した。便意を催したが口が利けず、身体も動かせず他人にそれを伝えるすべがなかったのだ。

大口を開けて子供のように泣いている息子を見て「一生こんなだったら、いつそこで死んでくれたほうが良かったのでは」と、父親としてはまことに申し訳ない気持ちになったのは事実だ。この日も涙を拭きながら帰宅した。夜半に息子の将来のことを考えると目が冴えて眠れなくなった。

8月15日（十日目）

嚥下可能になったので鼻からの栄養補給は終了した。五段階の食事のうち四番目（お粥）のレベルの食事。哲也の銀行口座を調べる。三菱銀行西支店、みずほ銀行西新宿店に行く。三菱は通帳がなければお金は下ろせない。みずほは通帳があるがカードがない。哲也の会社に電話で、哲也の机に通帳があるか聞いたがないとの回答。

8月18日（十二日目）

飲み物を欲しがれば与えても良いとのこと。第一生命とソニー生命に電話して保険金の申請方法を聴取した。幸い、重大疾病保険にも加入していた。いずれも退院後または六十日経過後の申請で良く、急がなくても良いとのこと。

8月19日（十三日目）

今日からリハビリ開始。はじめて二階のリハビリ室に行く。話し方、手の運動、足の運動など計九十分。「リハビリすると歩けるようになるわよ」とナースが声をかける。「今日は何月何日？食事は美味しいですか？多い？少ない？」哲也は満足に返事ができない。

両手でテーブル上のタオルをつかって雑巾がけのような運動を三十回。次いで左手で宙に浮いたバールを打ち返す運動。右手は全く利かない。

卓上で円錐のプラカップを順に積み上げる運動十回。草臥れて途中で休憩。その他足を曲げる運動、大きなボールを手で押す運動。うつぶせになる運動など。哲也は相当疲れた模様。

山口担当医「八月二十八日頃、脳内の出血液を抜く手術をやる予定です。また九月の第二週に初台のリハビリテーション病院に転院させるように初台と連絡をとりました。とりあえずご両親は初台に電話して面接を受けて下さい」

哲也の勤務先にお邪魔して社長にお会いし、現状を報告し、ご意見を伺った。以下社長の話。

哲也は役員なので有給休暇のシステムは適用されないが、会社としては休職にすることも考えていない。本人は社内の評判もいいし、将来、社長の息子が会社を継いだ際の重要サポーターとして考え、現在の執行役員から取締役になることを計画していた。私が社長就任中は哲也を絶対守るから、早くよくなつて欲しい。会社からの給料の振込先銀行の変更については会社総務部から書類を送らせる。

この有難い話を哲也に伝えるが、本人はどこまで理解しているのやら。

第3週目

リハビリ室に行ったら哲也はベッドに寝かされていた。リハビリ作業開始後フラツとした由。血圧が上がリ、百十と百六十。大事をとってこの日はリハビリ中止。

哲也ははじめて「アノー」とか「デ」などと発音した。また、左手で中村哲也と漢字で書こうとした。リハビリ作業の最終工程だけ見学。三角錐を左から右へ積み上げる運動だ。はじめは十個でヒーヒーだったが、今日は二十個できた。

まだ、お手玉を右手で拾って籠にいれる運動はできない。右手でお手玉を左にずらす運動がやっとできた。右手が少し動いたということか？

血圧も安定し良好のよし。なにか喋りたいが言葉が出ないので焦れている。「マー」ともいえるようになった。顔立ちも少しよくなった。こちらの言うことは六十%くらい分かる様子。髪の毛を刈られ坊主頭となる。「丸坊主のほう

が可愛いね」とナースにからかわれる。実際はラスプーチンのような容貌になったのだが。

自宅にある彼のパソコンのパスワードを聞いたが、分からないという。そのうちに思い出してくれるだろう。

第4週目

哲也は八月二十八日に開頭手術することに決定。事前に丁寧な説明を受ける。

「病名・左被殻出血（高血圧性）

手術名・定位的血腫除去術

必要性、有効性・左前頭葉を中心に35×35×70ミリの大きさの脳内出血を起こしています。出血により、右片麻痺、失語が出現しています。

出血によって神経線維が直接損傷を受けている部分と血腫による圧迫によって影響を受けている部分が存在します。血腫を除去することで、圧迫している部分の神経症状の改善を目指します。少しでも神経症状が改善すれば、今後のリハビリテーションにとっても有用であろうと考えます。

手順は、まず手術室で局所麻酔を用いてフレームを取り付けます。その状態でCTを撮影し、座標軸を設定し、その後、再度手術室へ向かいます。

手術は、左前頭部の頭蓋骨に五百円玉くらいの大きさの穴を穿ちます。吸引用のプローベ（棒のような器械）を血腫に向けて挿入していきます。プローベの方向は予め設定された座標軸により決まります。患部に到達したら安全な範囲で血腫を吸引します。無理に吸引すれば、周囲の脳組織や血管を損傷する危険性があるので、50〜70%の血腫の除去を目的とします」

8月28日

午前九時から脳内の血液を抜く手術が始まる。キャリアーに寝かされ頭にスチール製のフレームを固定された哲也が手術室に行く前、ナースが代わるがわる声をかける。「哲也さん、頑張ってるね、すぐ終わるよ」

血液は三百CCほど抜いた由。オペの実時間は四十分だが、他に検査があり病棟に戻ったのは十二時三十分だった。

哲也は声を掛けると明るい声で「ハイ」と返事をする。頭は四針ほど縫ってある。白い帽子を被り傷口を保護している。

哲也は、ベッドに戻り、左手で自分の名前を漢字で書くことができた。褒めると嬉しがっている。

8月31日

妻と一緒に初台リハビリテーション病院を訪問した。素晴らしいホテル並みの設備だが差額ベッドしかなく非常に高価。だが、背に腹は代えられない。

通常ならベッドが空くまで何か月も待つ場合もある由。医療センターから早めに申し込みをして貰ったからすぐに入院できたのだ。

哲也の発音できる音は「それから、あのね、まあ、うーんと、でもね」などの接続詞のみで、名詞、動詞は発音できない。

9月1日

九月になってリハビリ進展。足に装具をつけて平行棒につかまって立ち上がり、無理やり歩かせられる。かなり疲れた模様で午後は車椅子上でずっとうな垂れて眠りたい様子。

と、突然ワーワー泣き出した。前途を思いやり泣いたのだと思い、いろいろと慰めるが泣き止まない。以前もあつたが小便がしたいとのサインを周囲が分らないので、泣いたとみえ、通常の二倍程度の尿が出るとケロリとしている。事後、看護婦さんに有り難うと頭を下げている。

9月2日

外部で購入した二歳用の絵本を見せる。トマト、リンゴなど発音ができない。無理に発音させても、意味のわからないうなり声になる。本人もじれったがる。看護婦さんに名前を呼ばれると「ハイッ」とはつきり答えるが「ハ」単独の発音は未だできない。

第5週目9月3日

リハビリ室での会話の練習で介護士からの質問。「病室でTVを見ない時は何をしていますか？ 昨日は哲也さんの家族構成を聞きましたね？」 哲也は返事ができない。

漢字を見て絵を探す訓練。左手で簡単な漢字を書く訓練など。「エ」、「イ」、の発音が難しいらしい。

歩行訓練ではいきなり左手に杖を持たされて「歩きなさい」といわれ哲也は当惑している。

歩行訓練は、①左手を伸ばし平行棒を掴む。②麻痺している右足を前に出す。

③左足を右足に揃える。

②ができず看護師が右から支えながら自分の足で哲也の右足を蹴るようにして前に出させる。

杖を頼りに二十歩ほど歩かせる。本人は必死にヨタヨタ歩いたが、見ている私はやっとここまで来たかと胸にくるものがあつた。

本人は相当消耗したのか、次の右手の訓練はキャンセルとなつた。「歩けるようになる」と初台病院に行っちゃうんだから。美味しいところはみんな初台に取られちゃう」と療法士がぼやいてる。

9月5日

今日はリハビリがないので午前中に車椅子に乗せて院内をドライブ。少しの間だが、病院の外の空気も吸わせた。本人もやや満足気。

午後横になりたいといったら看護師が今日はリハビリがないのだから一日ずつと起きていなければダメと。

9月7日

哲也の勤務先の(株)東京セントラルを訪問し、社長に挨拶、総務の原川課長さんと事務的な打ちをあわせ。

一方、入院中の哲也は四十歩も歩けたらしい。本人も疲れがなく自信を持つ様子。また尿瓶を自分で支えて排尿できた。自由にベッドの角度を替え身体をずらせて具合を直すことが出来るようになった。

自分でトイレに行けるようになったら、転院できるから頑張れと励ます。目的があるとだいぶやる気が出てきたようだ。

看護師からも哲也の状態はいつでも転院はOKだときかされ、本人も自信を持つ。いつ転院できるかを聞いたら、初台リハビリ病院の都合で決まるのでもう少し待って欲しいと。

哲也は動かない右手を左手で掴み、頭の裏側に持ち上げる。左手で常に右指をもんでいる。それにしても早く喋れるようになって欲しい。

9月8日

歩行訓練三往復。卓上腕振り運動三十×二回。右腕を大きく回転できるようにした。本人も嬉しい。雑巾がけ二十×二回、口の中で数を数えている。

字をみて絵を選ぶ問題や「AがBとCをする」「AをBの横に並べる」のよ

うな問題はまだ難しい。相当疲れた様子。

9月9日

身体の調子がよくなると哲也はだいぶ退屈してきた。ところが我々は彼の喋る言葉が分からない。曲がった口元を見ながら話の内容を類推するが何回聞いてもわからない。哲也もそのたびに情けない顔をする。お互いに疲れる。

哲也は突然、銀行の暗証番号の話をはじめた。発音ができないので数を指で示そうとするがなかなか分からない。苦心の末、最後にやっと四桁がわかった。パソコンのパスワードはまだダメ。

第6週 9月11日

コンビニのATMで哲也のいう暗証番号が正しいことを確認した。携帯電話が未だに行方不明だが、哲也は急に思い出して、病院の一階（救急棟）で聞いてくれと主張している。彼が携帯電話のことを言っていると気づくまで十分以上もかかった。午後弟の晋也と再訪時、紙に090と書いてあり、晋也が携帯電話のことだと気づく。

可愛いらしい顔の関谷先生がベッドまで回ってきて、哲也の頬が締まってきたといわれ、哲也嬉しい。左手で右手を肩の上まで上げてデモンストレーションをして先生の驚く顔をみて哲也は満足気だ。

十七時頃初台リハ病院より自宅に電話があった。九月十四日または十五日に転院受け入れ可能という。哲也おおいに喜ぶ。

9月12日

携帯電話は救急棟の事務所に聞くと本院の庶務課に聞けばよいとのこと。月曜日に聞いてみることに。哲也は終始右手を懸命に揉んでいる。眼鏡の度が合わなくなつたとのアップールあり。

9月13日

昼食後、車椅子に乗せて病院の外に連れて行った。直射日光下は少し暑かったが緑陰は快適だ。外部の空気を吸って哲也も深呼吸。

こちらが若松町、ここを曲がると若松河田の地下鉄の駅だと教えると、ああそうだったのかと土地勘が戻ったらしく、フーツと感嘆の声を出した。

病室に戻り、哲也に「右足のふくらはぎを揉むと指が少し動くね」といった

ら、突然ベッドを水平に倒し、仰臥して右足の付け根を上げて見せてくれた。今まで全然動かないと諦めていた足が持ち上がった。感動して涙がこぼれた。それをみて哲也も少し涙ぐむ。

あとは少しでも早く喋れるようになることだ。奇跡よ起これ！

この日、哲也は左手でよれよれながら漢字で「新宿」と書けた。

9月14日

明日転院するので午前中はリハビリの各先生に挨拶。

初台の口座にデポジットを振込み。医療センターで十五時に計算が完了するので待つ。庶務課に哲也の携帯電話の有無を確認したが、届けられてない由。さんざん探し回ったが、後日この携帯電話は、哲也が初台を退院して、自分の部屋に置いてあったカバンのポケットにあったことを見つけた。

哲也は自分の言う言葉が分かってもらえずヒステリー気味。何故分かってくれないかと恨めしそうに詰問される。こちらも泣きたい気持ち。一生こんな会話が続くと思うと気が重い。哲也は母親や弟にはそんな素振りも見せないらしい。親父が優しくすぎて甘えているのかも知れない。とにかく不憫である。

9月15日

8月8日に発症して緊急入院した国立国際医療センターを約一ヶ月後に退院することになった。

朝九時には車椅子タクシーが迎えに来た。九時三十分、初台リハビリテーション病院に到着。早速病室に案内され、大勢のスタッフが入れ替わり立ち代り挨拶に来てくれた。担当医師のほか介護チームのリーダー。理学療法士（PT）、作業療法士（OT）言語聴覚士（ST）、担当看護師、ソーシャルワーカー（SW）などが順番に自己紹介し仕事の概要を説明する。

当方は理解能力の回復していない哲也本人とリハ病院なるものの機構、機能が何も判らない両親だ。とにかくよろしくお願いするほかはない。

担当の笹井医師の説明概要は次の通り。

「まず二ヶ月程度の積極リハビリをやる。その結果、足は家庭内では杖無しで歩行が可能となる。屋外では安全のため杖を使うが歩けるようになる。

右手は重度の障害で物を持つこともできまい。その分左手を訓練してカバーさせる。言葉は、はじめに単語、次に簡単な文章を喋るのに三ヶ月かかる。三ヶ月で退院しその後、外来に切り替え一年は訓練が必要。六ヶ月後に障害者手

帳を申請するように」

右手は治らないと聞いて哲也はさすがにガツカリしていた。当方から病院に対して、差額ベッドでは親の資金が続かないので安い病室を要望した。空きが出るまで一ヶ月は待ってくれとのこと。

入院後の最初の昼食時に、食堂を覗いて中々良いことに安心した。費用はかかるけど全てが完備している、安心してまかせられる病院と見た。早速哲也の会社と友人たちに連絡をとる。発病一月半で第一段階が終了した。

人生ってこんなことがあるんだ。突然の出来事で、無我夢中で対応したが、心身ともに本当に疲れた。

私の血液型はA型で、なんでもきちんと情報をとり処理しなければ収まらない性格。頼りにしていた長男が倒れたので、人生の計画が一举に瓦解し、言い知れぬ先行きの不安にさいなまれた。が、自分ひとりで処置できることは皆無であった。このやるせない悲しみというか苦しみというか、口に出せば愚痴になるし、話をする相手もいなかった。

振り返ってみると緊急事態とは言え、周囲の方にと迷惑をかけた。予定していた会合、会食は全てキャンセルしご迷惑をかけた。

また脳障害の既往症のある先輩諸氏には、突拍子もない質問をぶつけ、皆さんに親切に対応していただき、いろいろと参考になった事項が多かった。

もう一件特筆すべきは。家族の結束である。妻の血液型はB型、次男のそれはO型である。二人とも家長の私があればこれもと、てんでこ舞いしているのを冷静に見守り、文句ひとつ言わずに適切に補佐してくれた。時間があると病院に詰めかけ、哲也の状況やら、病院の指示や事務的事項への対処も素早く適確に行うことができた。皆不安を口に出すことなく、非常事態を協力して乗り切ったのだ。

私は良い家族を持って幸せだ。哲也の一件がなければ。(続く)

(10648語)